

序

急性腹症の診断は、医師の力量が問われる領域の1つです。腹痛を訴える患者さんに対し診断を確定するまでの道のりは、経験豊富な医師にとってもしばしば困難を伴います。画像診断や血液検査といった技術の進歩により、診断性能は飛躍的に向上しているものの、**最終的に病歴や身体所見と検査結果を統合し、正確な診断を導き出し適切な治療を行うのは医師自身**です。この過程こそが、急性腹症の診療における最も難解な部分と言えるでしょう。CTを撮影すれば答えが見つかるように思えますが、疾患を疑って見ないと映っている異常所見も見逃してしまうものです。

そこで本書では、病歴と身体所見から鑑別診断を考えるプロセスに焦点を当て、その解説に力を注ぎました。急性腹症の診断において、初療時にすべてを診断しようとするのは現実的ではありません。そのため、まず見逃すと**致命的な転帰をたどる病態**を念頭に置き、**適切な行動をとるための指針**を提示することを重視しています。

さらに、本書の身体診察に関する項目では、身体診察を愛し、後輩の教育に情熱を注がれている中野弘康先生に執筆をお願いしました。その熱意と深い知識が、多くの若手医師のみなさんに新たな学びを提供してくれることでしょう。

本書ではこのように、急性腹症の診療における基礎を築くことを目的としています。若い医師のみなさんが今後経験を積むなかで、この基礎をしっかりと身につけていただきたいと願っています。**基礎が疎かであれば、どれほどの経験も十分に活かすことができません**。本書が皆様の成長の一助となることを願っております。

最後に、本書の作成にあたり、産婦人科領域で監修いただいた淀川キリスト教病院の柴田綾子先生、そして企画段階から完成まで常にご支援くださった羊土社編集部の大冨有紀子様、阿部壮岐様に心より感謝申し上げます。

本書が急性腹症の診療に携わるすべての医師の助けとなることを願って。

2024年12月

社会医療法人城西医療財団 城西病院 内科
小林健二